

【巻頭言】

災害大国日本で被服衛生学の役割を思う

潮田ひとみ

東京家政大学

2024年1月1日に発生した「令和6年能登半島地震」により犠牲になられた方々に、心よりお悔やみ申し上げますとともに、被害に遭われた皆様、ならびにその関係者の皆様に対して、心よりお見舞い申し上げます。皆様の安心・安全の確保と一刻も早い復興を心よりお祈り申し上げます。

日本人にとって、元旦は特別な意味を持つ。私にとっては、「年内に終わらせなければならなかった仕事を持ち越してしまった。年賀状も書くことができなかった。でも、元旦からは新たな気持ちで、今年こそ、締め切りを守ってご迷惑をおかけしないように頑張ろう！」と、過去を水に流して、リセットする日でもあった。そんなリセットされるはずだった元旦の夕方に能登半島地震が発生し、アナウンサーの絶叫する音声が響いた。

被服衛生学部では、過去に衛生学セミナーや公開講座において、日本は、地震だけでなく、台風やそれに伴う洪水などによる被害が頻繁に発生する、災害大国ニッポンに他ならないこと、これらの災害に対して、被服衛生学はどのように対処することができるのかを考えてきた。そこでの知見から、3日間の防災備蓄が必要であると認識していた。発災後72時間は、救助活動が最優先に行なわれ、ライフラインの復旧は72時間以降にならざるを得ないためである。

しかし、能登半島地震では、地形上の問題や気象の関係から、救助活動が難航し、ライフラインの復旧も72時間後すぐに開始とはならなかった。発災から3か月が過ぎても、いまだに断水が続いている。どこに暮らしているかによって、必要とされる防災備蓄量は異なる可能性があり、3日分は最低ラインと考える必要があるようだ。

防災備蓄品には、水とレトルト食品以外に毛布（アルミシート）、衛生用品、懐中電灯、工具・電池類などが挙げられている。いわゆる「被服類」は防災備蓄品としては挙げられていないが、災害時に備蓄品を使いこなし、自分と周りの方々の命

を守るためには被服衛生学の知見が欠かせない。

避難生活を余儀なくされることとなったときに、どのように自分の身体の周りに乾いた動かない空気を纏うか、アクシデントで皮膚が濡れてしまったときに、どのように湿潤による体温低下を防げばよいかといった、安全で健康な衣服の着用法は、私たち被服衛生学部会の部会員にとっては周知のことである。部会として重要なことは、これらの知見を具体的に発信していくことだろう。

例えば、自分の身体の周りに乾いた動かない空気を纏う方法として、①くしゃくしゃに丸めて空気を含ませた新聞紙を皮膚と肌着の間に入れると温かい、②避難所の床に直接寝ると（熱伝導率が高い床材によって体温が逃げやすくなるから、）段ボールを1枚敷いた上に寝た方が良い、③厚みの異なる毛布が2枚あるなら、床側に分厚い毛布を敷いた方が良い、④アルミシートは触って冷たい面は皮膚から遠い側に向けた方が良い、と他の具体的な言葉で置き換える。また、湿潤による体温低下を防ぐためには、①濡れた靴や濡れた服は脱ぐ、②着干しでは乾かないし危険、③着替えられなかったら、乾いた新聞紙をくしゃくしゃにして皮膚と濡れた下着の間に入れる、④着替えられなかったらポリ袋に空気をいれて口をしぼったものを皮膚と濡れた下着の間に入れて、濡れた部分と皮膚が接触しないようにする、のように、具体的にわかりやすい「方法」を示し、発信していくことが、社会貢献につながり、被服衛生学部会の果たすべき役割と考える。今後とも、部会員の皆様のご協力をお願いいたします。

<連絡先>

〒173-8602 東京都板橋区加賀 1-18-1
東京家政大学家政学部服飾美術学科 潮田ひとみ
TEL: 03-3961-8568
Eメール: ushioda-h@tokyo-kasei.ac.jp